

『Linux オープンソース白書 2006』 最新調査結果に見る オープンソースソフトウェア市場の現在

インターネットの登場がそうであったように、「オープンソース」という考え方もまた、画期的な情報流通として大きなインパクトを与えた。今やオープンソースはビジネスとして、あるいはビジネスを超えた文化として、やはりかつてのインターネットと同じように加速的に広まりつつある。そしてまた、オープンソースソフトウェア(OSS)の普及は、ウェブ系フロントシステムが牽引している。

オープンソースソフトウェア市場の現在を知るために、『Linux オープンソース白書 2006』(日本Linux協会 / LPI-Japan 協力、インプレス発行)から最新の調査結果と展望をお届けする。

< 調査対象 >

調査対象：一般ユーザー企業 / 調査手法：郵送によるアンケート / 調査期間：2005年6月下旬～7月中旬



[Linux サーバーの導入率が商用 UNIX を上回る]

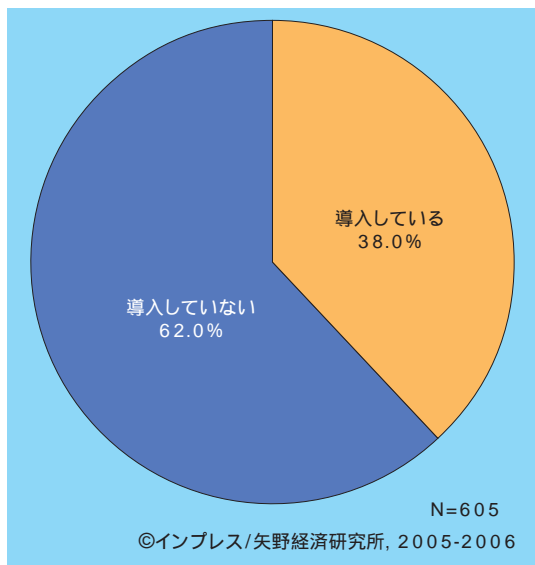


図1 Linuxサーバーの導入率

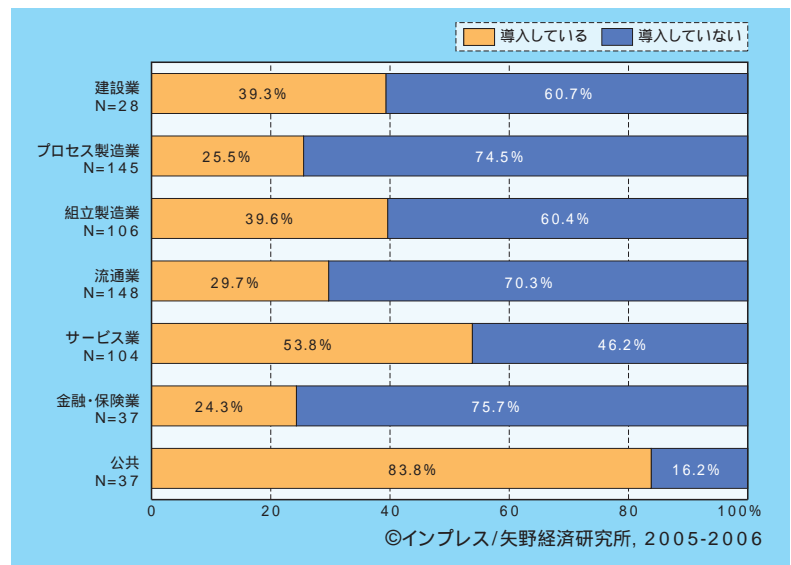


図2 業種別に見るLinuxサーバーの導入状況

ユーザー企業や公共でLinuxサーバーを導入している割合は38.0%(図1)、商用UNIXサーバーの導入率26.4%(『Linux オープンソース白書2006』収録)を大幅に上回った。ほぼすべての企業や

公共で使われているWindowsの地位は不動だが、商用UNIXをLinuxが抜き去ったという調査結果は特筆に値する。業種別に見た場合、官公庁や自治体などの公共で83.8%の導入率となり、他業種

に比べて格段に高い数値となった(図2)。反対に導入率が最も低かったのは24.3%の金融・保険業、その次に低かったのがプロセス製造業の25.5%で、導入率は約4分の1にとどまっている。

[Linux サーバー上のオープンソースソフトウェア利用率は7割を突破]

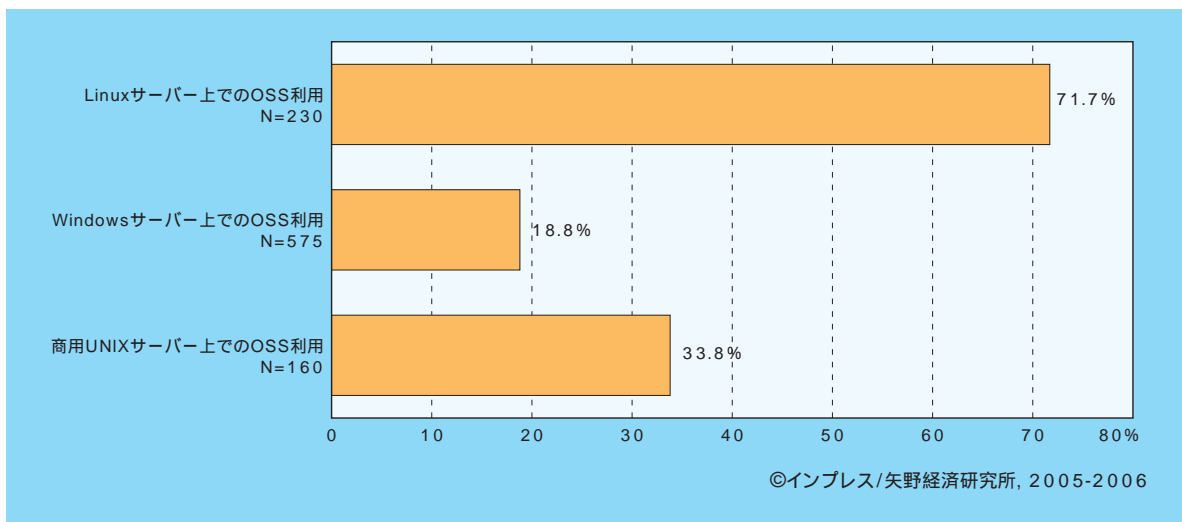


図3 サーバー OS 別に見たオープンソースソフトウェア利用の割合

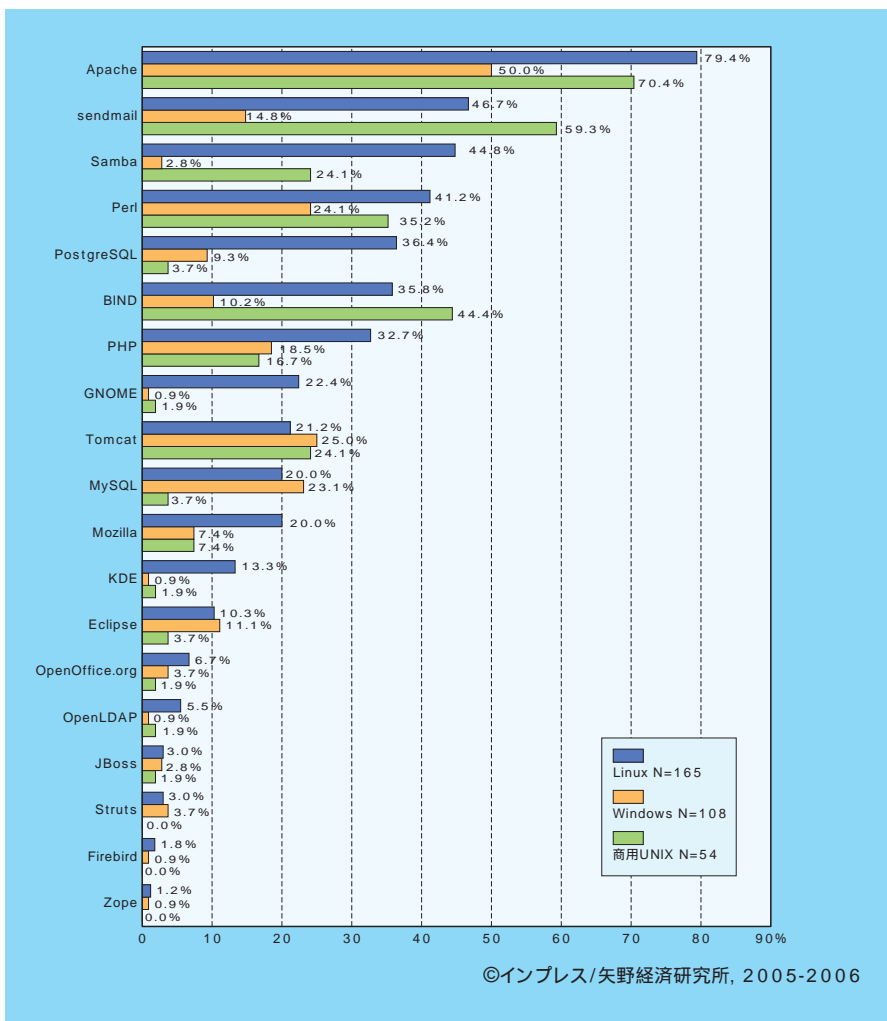


図4 サーバー OS 別に見た利用しているオープンソースソフトウェアの種類

オープンソースソフトウェアの利用率をサーバー OS 別に比べてみると、Windows サーバー上での利用が18.8%、商用UNIXサーバー上での利用が33.8%とそれぞれ低い数値にとどまったのに比べ、Linuxでは71.7%となり、Linuxサーバー上での利用が圧倒的だった(図3)。Linux自体もオープンソースソフトウェアであることから、その上でもオープンソースを利用することは自然な流れであると考えられる。

また、利用しているオープンソースソフトウェアの種類をサーバー OS 別に比較したところ、代表的なウェブサーバーアプリケーションである「Apache」の利用がLinuxサーバー上で79.4%、Windowsサーバー上で50.0%、商用UNIXサーバー上で70.4%となり、どのサーバー OSでも最も多いという結果となった(図4)。ウェブサーバーを構築するという目的がオープンソースソフトウェア利用の多数を占めることがうかがえる。

[回答者の71.6%が人材不足を問題視]

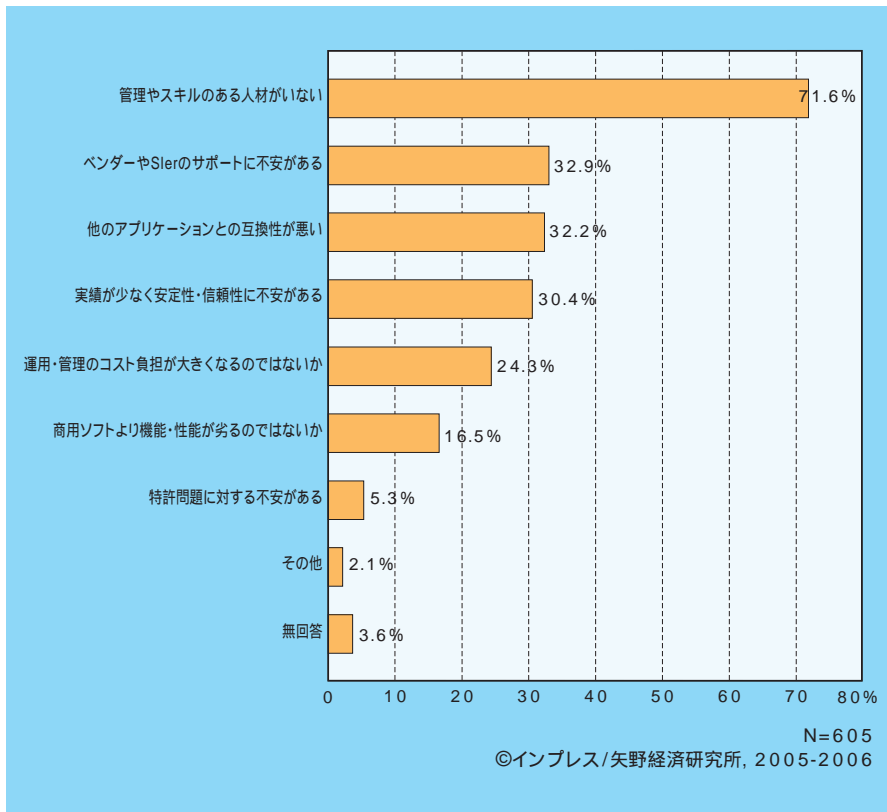


図5 オープンソースソフトウェアに対する問題点や不安(複数回答)

オープンソースソフトウェアの問題点や不安については、7割超の回答者が「管理やスキルのある人材がない」を挙げ、他の問題点に比べて突出する結果となった(図5)。

Linuxサーバーを導入している回答者にも問題点や課題など同様の質問をしたところ、「(Linuxサーバーを)管理できる人員が不足している」が63.5%で、「ベンダーやSierのサポートが不十分である」18.3%、「対応するアプリケーションが少ない」16.1%などの他の問題点に比べて圧倒的となっており、人材不足という同じ問題が生じていることが明らかになっている(『Linuxオープンソース白書2006』収録)。

したがって人材不足の解消は、オープンソースソフトウェアの全体的な課題であると言える。

[35.6%がオープンソースソフトウェアの導入に前向き]

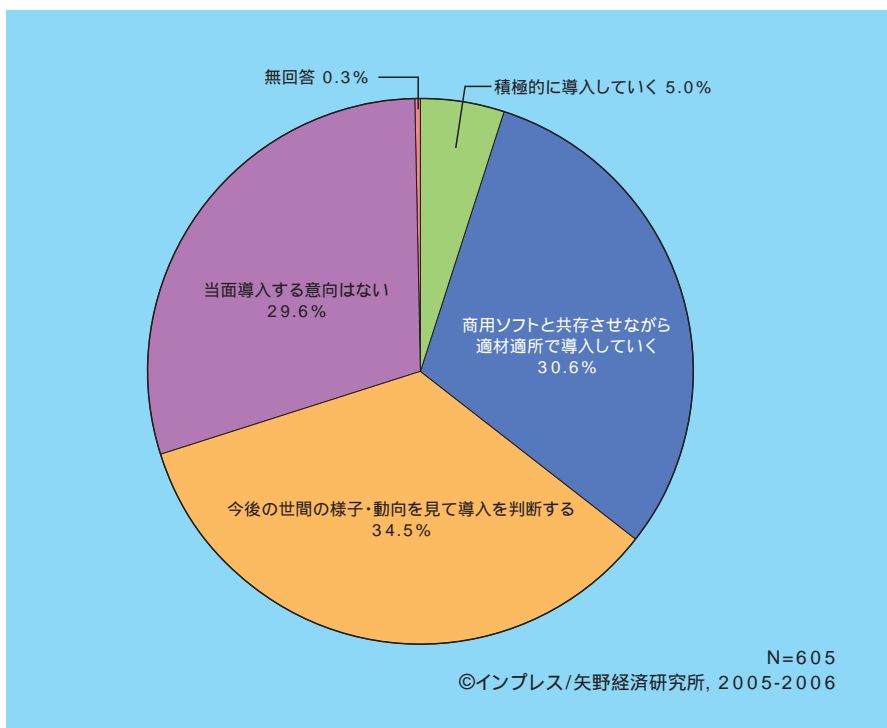


図6 社内情報システムにおけるオープンソースソフトウェアの導入意向

今後オープンソースソフトウェアを導入する意向があるかを聞いたところ、「積極的に導入していく」5.0%、「商用ソフトと共存させながら適材適所で導入していく」30.6%という結果となり、前向きな回答が3分の1を占めた(図6)。また、「今後の世間の様子・動向を見て導入を判断する」が34.5%、「当面導入する意向はない」が29.6%と、今後のオープンソースソフトウェア導入意向について、ほぼ3分割される傾向が見られた。

「今後の世間の様子・動向を見て導入を判断する」と答えたユーザーをどれだけ導入に踏み切らせることができるか、いわば“無党派層”の開拓が今後のオープンソースソフトウェアの普及のカギを握るだろう。

[ユーザーが最も期待することはシステムコストの削減]

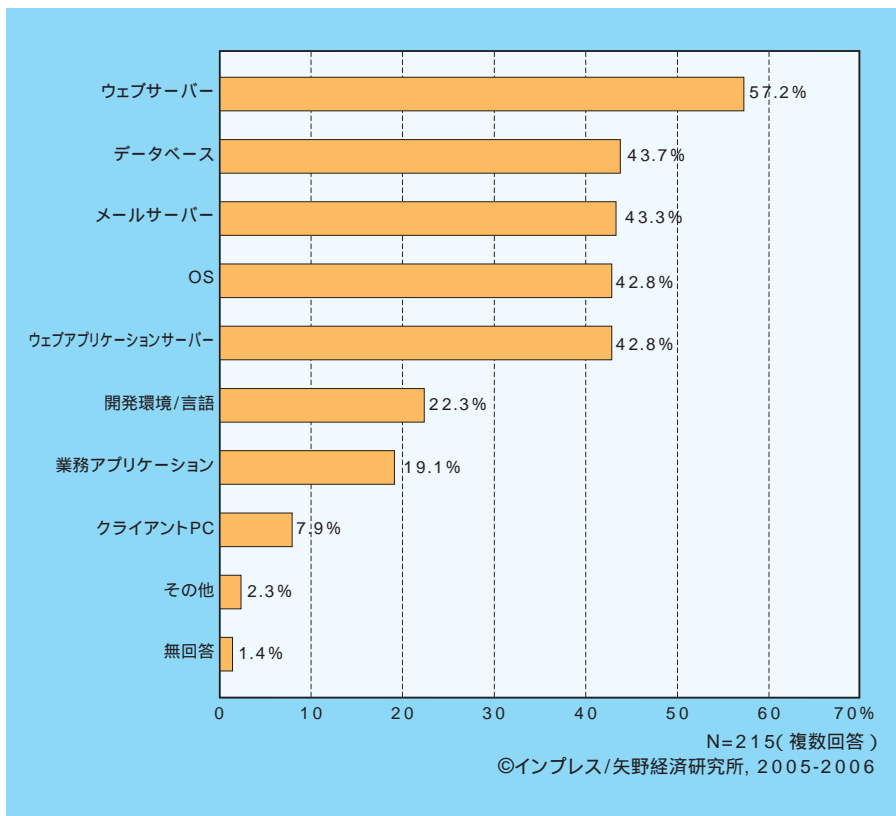


図7 導入したいオープンソースソフトウェアの主な種類

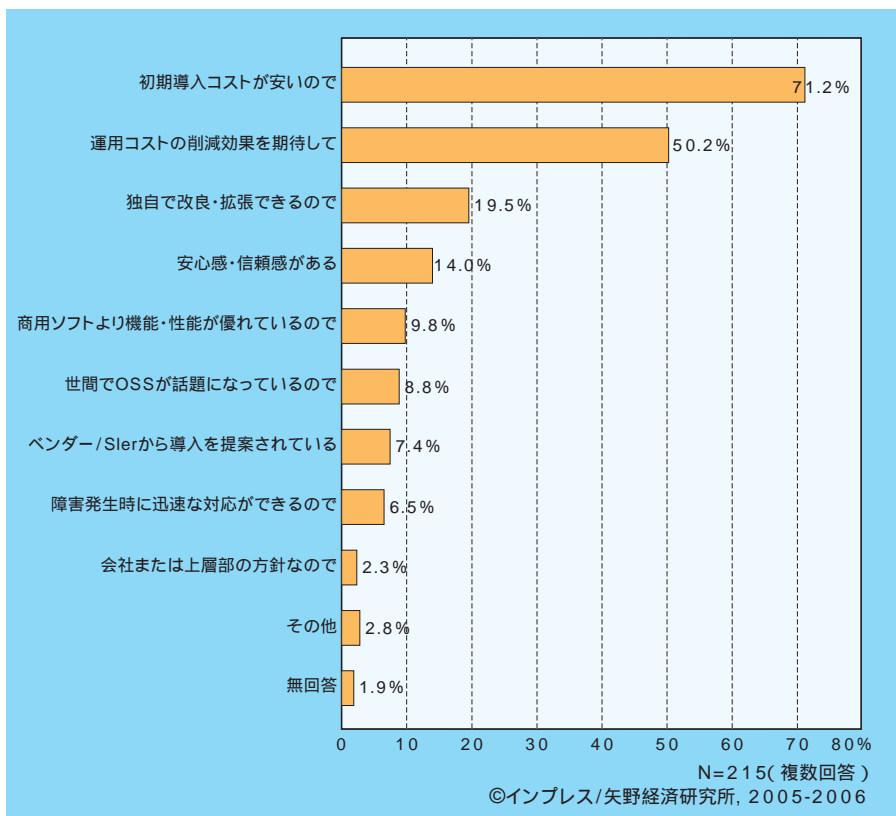


図8 オープンソースソフトウェアを導入したい理由

今後オープンソースソフトウェアを導入する意向がある回答者215に対し、導入したいオープンソースソフトウェアの種類を聞いたところ、最も回答が多かったのは「ウェブサーバー」の57.2%となった(図7)。図4でウェブサーバーアプリケーションである「Apache」の利用が最も多かったことと考え合わせると、やはり導入の一番の目的はウェブシステムの構築となるようだ。これに続く項目は40%強で横一線に並んでいる。

また、オープンソースソフトウェアを導入したい理由としては、「初期導入コストが安いので」が71.2%、「運用コストの削減効果を期待して」が50.2%と、システムコスト削減への期待が理由のほとんどを占めている(図8)。これを従業員規模別や年商別に見た場合、大規模・大手企業では初期導入コスト削減と運用コスト削減との差がほとんどなくなってくる(『Linux オープンソース白書2006』収録)。このクラスでは情報システムの規模が大きく運用にも膨大なコストがかかるため、オープンソースソフトウェアを導入することで現状の負担を改善したいという意図が読み取れる。どちらにしろ、ユーザーが最も期待することは、システムコストの削減であることは間違いないだろう。

これまで見てきたように、オープンソースソフトウェアの普及は、ウェブサーバーやメールサーバーなどインターネットに関する領域から始まっている。今後は、オープンソースと親和性がないと思われていた基幹系業務システムまで広がっていくだろう。インターネットがB to C、C to Cのトランザクションコスト(モノ・サービス・情報などあらゆるやり取りにかかるコスト)を削減し変革を促したように、オープンソースはB to Bのあり方を変え、最終的にはウェブサービス技術などを取り込んで、企業情報システムをオープン化する可能性を秘めている。



[インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ] ご利用上の注意

このPDFファイルは、株式会社インプレスR&D(株式会社インプレスから分割)が1994年～2006年まで発行した月刊誌『インターネットマガジン』の誌面をPDF化し、「インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ」として以下のウェブサイト「All-in-One INTERNET magazine 2.0」で公開しているものです。

<http://i.impressRD.jp/bn>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容(技術解説、URL、団体・企業名、商品名、価格、プレゼント募集、アンケートなど)は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者(執筆者、写真の撮影者、イラストの作成者、編集部など)が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は収録されていない場合があります。
- このファイルやその内容を改変したり、商用を目的として再利用することはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用する際は、出典として媒体名および月号、該当ページ番号、発行元(株式会社インプレス R&D)、コピーライトなどの情報をご明記ください。
- オリジナルの雑誌の発行時点では、株式会社インプレス R&D(当時は株式会社インプレス)と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めましたが、すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接のおよび間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

このファイルに関するお問い合わせ先

株式会社インプレスR&D

All-in-One INTERNET magazine 編集部

im-info@impress.co.jp